

第3章 佐賀平野における人とクリークとの関係の変化

佐賀平野では、その広大な平地のすべてに水を供給するために、クリークを掘って貯水をしていた。農業や生活にクリークを利用するため、用水や排水のしくみには、様々な人々の知恵があった。

佐賀平野において、人とクリークとの関係を探る上で、営農形態や灌漑水利など、農業史に残る特徴や変化、またそのときどきの社会情勢などの時代背景をおいて語ることはできない。しかし本章では、特に人とクリークの関係がにじみ出ていると考えられる、クリーク地帯独自の農法や日常生活における慣習など、人間生活における民俗的な部分に注目し、文献およびヒアリング調査により、その関係性がどのように変化していったのかをまとめた。

3-1 戦前における人とクリークとの関係

農業用の機械や水道が普及する以前の戦前の佐賀平野においては、農業や生活のための水のほとんどをクリークに依存しており、人々の知恵や努力によってクリークの利用・管理が続けられてきた。そのため、クリークの利用・管理の上で、独自の慣習や文化が多く、人間とクリークとの関係が密接であったといえる。この密接な関わりが具体的にどのような行動や意識に現れているかについて述べていきたい。

3-1-1 クリークと農業

佐賀平野の農業は、クリークを抜きにしては語ることはできない。大正時代から昭和初期にかけて、佐賀農業は「佐賀段階」¹⁾と呼ばれる飛躍的な発展を遂げた。ここでいう「佐賀農業」²⁾とは、クリーク地帯の農業のことである。

現代において農業の機械化による効率化が進むまでは、このクリーク地帯の農業は特徴的で、独特な農法やそれにとまなう道具が多くあった。広大な平野部において、利水の困難さから、水の問題はいつの時代においても農家にとって悩みの種となっていた。そのような中で、農家の人たちは、佐賀平野やクリークの地形や性質を利用してクリークと継続的に付き合っていく方法を培ってきたのである。その方法とは、用水労働にはじまり、堀にたまった泥土をさらうなど、大変な労力を要するものであった。この労働をより効率的に行うために、その方法や道具が生み出され、独自の発達を遂げたのである。この方法は、クリーク農法と呼ばれ、クリークなどの環境とうまく付き合っていくために、受け継がれ、工夫を加えつづけられた住民の知恵であった。

(1) クリーク農法

クリーク農法は、農業における用水・排水労働など佐賀平野の地形的特徴をうまく利用するための方法であった。この農法の特徴として、踏車揚水、馬耕、泥土揚げによる維持管理が挙げられる。以下、クリーク農法について述べる。

揚水灌漑

水田が高く、堀の水位が低いという地形のクリーク地帯では、水田に揚水することが困難であった。この揚水問題はいつの時代も農家の人々を悩ませており、水田に効率的に水を入れる工夫がなされてきた。水を下から上に揚水するには、人間以外の力も必要になってくる。そこで、揚水灌漑の道具が発達していったのである。大正時代末期に電気による灌漑方法が出現するまでは、踏み車による揚水（図 3-1）が主であった。人力と道具によって揚水されていたのである。

踏み車は、約 200 年前から始まったとされ、それ以前は汲み桶による揚水であった³⁾。踏み車の出現は、農家の揚水労働を大きく助けるものとなったが、重労働であることには変わりなく、踏み車を 2 段にも 3 段にもかけて揚水していた。昭和 35 年の新聞記事⁴⁾に、「いなかの農村ではいまだに子供を背におんぶしたオカミサンが盛んに踏み車をふんでいる光景が見られる」とあり、この頃までは使用されていたことがわかる。また、記事中に「背に子供をおんぶし」とあり、これは一見、単に子守りをしながらの仕事かと思われるかもしれないが、これにも揚水労働の上での意味がある。踏み車による揚水量は、体重に比例するため⁵⁾、少しでも体重を増やして水を水田に入れようとしていたのである。

また、このように大変な労力を費やして水田に揚げた水を、なるべく元に戻さない

ように、綿密に水田の床じめをしておくこと、クリークと水田の間に、道路やや畑を作って漏水を遮断すること、この道路や畑に小溝を通し、水車を掛ける口から水田までを直結し、田越し灌漑をなくすことなどを行っていた⁷⁾。この踏み車による灌漑方法にみられるように、水を得る大変さから、農民の水の大切さを思う気持ちが養われていたことが読み取れる。



図 3-1 踏み車による揚水
（「日本の民俗 佐賀」⁶⁾より）

馬耕労働

農業に機械が入る以前は、馬による耕耘（図 3-2）が行われていた。昭和に入ってから「耕耘機」にとって代わられたが、この馬耕にも、クリークとの付き合い、人と人との付き合いをみることができる。馬耕においては、馬による耕耘と土地の性質を考えた道具が用いられていた。この道具として、「大犁」、「クレカエシ犁」、「水田犁（図 3-3）」の 3 種があり、これらがセットで使われていたそうだ⁸⁾。この道具は、揚水した水がクリークに還流しないための耕耘の方法には欠かせず、特に「水田犁」は、前に述べた「床じめ」を行うためのもので、クリーク地帯の馬耕の道具を代表するものであった。



図 3-2 馬耕労働
（「知られざるふるさとの自然史」⁹⁾より）



図 3-3 水田犁
（「知られざるふるさとの自然史」¹⁰⁾より）

しかし、馬耕において最も注目すべきは、馬の飼育である。農耕に馬を使うとは言っても、小規模農家では、馬を所有していない家も多かった。そこで、何件かの農家が共同で飼う「モヤイ馬」という制度が生まれた¹¹⁾。また、大規模農家では、家族労働力では広大な面積をまかなえず、「馬使い」を雇うという年雇人の制度をとっていた。また、馬を使わない時期、山間部に「預け馬」をする習慣もあった。

この馬耕労働には、揚水灌漑まで考えた農耕の方法と、馬を媒介とした人間関係、また、肥沃な平野部における作馬の必要性和生産性の悪い山間部との経済落差を埋めるという、持ちつ持たれつのかん係をみることができるのである。

クリークの管理活動としての泥土揚げ

昔のクリークと農業の話をするときに、その当時を知っている住民が最も多く語るのが泥土揚げである。佐賀平野のクリークは、人工的に掘られたもので、人間が管理しないと陸化してしまう。そこで、毎年休閑期に堀にたまった泥土を揚げるという慣習があった。堀にたまった泥土のことを地元の人々は「ゴミ」「ゴイ」と呼び、泥土揚げは、「ゴミ（ゴイ）クイ」「ゴミ（ゴイ）アゲ」と呼んでいた。

泥土揚げは主に 2～3 月の休閑期に行われる。まだ寒いこの時期に、堀の泥土につかって作業をする農家の人たちの苦勞が伺える。この泥土揚げの最も大きな目的として、堀にたまった泥土を揚げて貯水量を保つこと、揚げた泥土を乾かして肥料とすることの 2 点が挙げられる。泥土揚げはその作業形態から、集落総出または近所の何件かの共同作業によってそれぞれの堀を移動しながら行われた。

泥土揚げをする際には、前もって堀の水を落としておく。このとき、上流の井樋は閉められ、水の疎通をいったん停止し、井樋の修繕が行われる。北川副町下武のSさんは、「前日から夜通し水車ばこいで堀の水は落しよったです。こいは、わっかもんの仕事やったですもんねえ。（前日から夜通し水車をこいで堀の水を落としていたんです。これは若い衆の仕事だったんですよ。）」という。若い者には厳しい仕事を与えられていたのである。



図 3-4 ベルトコンベアによる泥土揚げの風景（2000 年「さが水環境フェア」にて）

大正時代から昭和にかけての泥土揚げの道具には 2 つあり、大正末期から昭和初期ごろから、図 3-4 のような電動のベルトコンベア、それ以前は図 3-5 のような汲み桶による作業が行われていた。この汲み桶はゴミクイ桶と呼ばれ、この桶の形は、堀の大きさや高さによって少しずつ大きさや角度が異なり、ゴミをかき出しやすいように金具がついているものもあった。このゴミクイ桶を、図 3-6 のように親と子に別れてタイミングを合わせて左右に振りながらゴミを水田にかき出した。このとき乗っている木材は、細く・まっすぐ・丈夫なものを山から川を下らせて平野まで送ってもらっていた。ここに山と平野とのつながりを見ることができる。また、このような道具を使い、役割を分担して泥土をかき出していたわけであるが、この役割分担にも地域特性があり、ゴミカキ手が最も重要な仕事であるところ¹²⁾や、それは若者に任せて、最も技術のある熟年者は上でのゴミアゲにまわるところもあった¹³⁾。特に堀の中に入ってゴミを集めるゴミカキ手は、冷たい堀中での作業のため、最もねぎらってもらえたそうだ¹⁴⁾。



図 3-5 ゴミクイ桶による泥土揚げの風景（「知られざるふるさとの自然史」¹⁵⁾より）

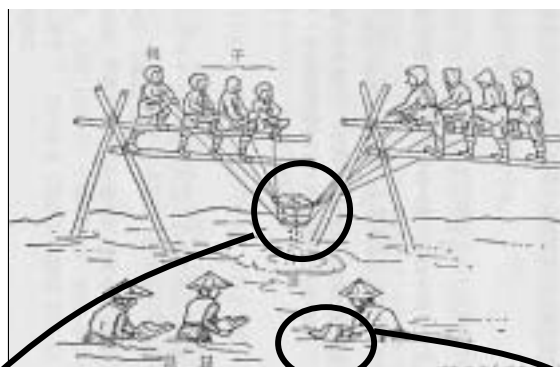


図 3-6 ゴミクイ桶による泥土揚げの風景（「佐賀平野の水と土」¹⁶⁾より）



図 3-7 ゴミクイ桶（佐賀中部農林事務所提供）



図 3-8 ゴミカキ桶

こうして水田にかき出された泥土は、広げられて自然乾燥を行い、肥料にされていた。化学肥料のなかった時代、これは大変貴重な肥料であった。そのため、泥土には所有権があり、それぞれの集落で所有や分配のルールがあった。堀の北側、または東側の、水田の所有者が権利を持つのが一般的であったが¹⁷⁾、千代田町嘉納では、「ひとつの堀は5年から10年おきに泥土を揚げるので、泥土は参加した人それぞれに分配していた」¹⁸⁾ということである。泥土の分配ひとつみても、地域ごとの特色がみられる。

泥土揚げの主な目的は前に述べたが、この目的のほかにも、魚とりという大きな目的があった。堀にはあらかじめヌクメという漁礁が設置してあり、泥土揚げや堀干しのときにこのヌクメを開いていた。ヌクメと堀干しについての詳しいことは後述するが、農家の人たちは、厳しい重労働の中に少しでも楽しみを見出してきたのであろう。

このように、泥土揚げという作業は、人とクリークとの関係が多面的であったことを最もよく表している慣習の一つではないかと考えられる。道具を用いた維持管理作業効率化のための工夫、集落内での共同作業という人間関係、ヌクメという魚を捕るための文化の発達など、人がクリークとの付き合いの中で培ってきた多面的で相互に影響を与える関係を見ることができる。

3-1-2 クリークと生活

(1) 生活用水路としてのクリーク

クリークは、昔から農業において佐賀平野に繁栄をもたらしたが、同時に農村の人々の生活用水路としても利用されていた。クリークからは飲料水や風呂水、その他生活雑水のほとんどをまかなっていた。そのため、農業と同様、生活においても貴重な水を得るための知恵や工夫をみることができる。

飲料水

現在のクリークの水質から想像することはできないが、水道普及以前は、井戸水とともに堀の水が飲料水として使われていた。各家庭にはハンズウガメ(図3-9)と呼ばれる飲料水を濾過浄化して貯めておくための甕が備えられており、早朝の最も水が澄んでいる時間に汲み上げ、ため入っていた。また、クリークの水のおいしさはというと、山から平野へ流れ、広大な平野をゆっくりと流れていくうちにまろやかになり、「お茶好きの人はアオの水でいれたお茶が一番おいしかて言わすらしかですもんねえ。(お茶好きの

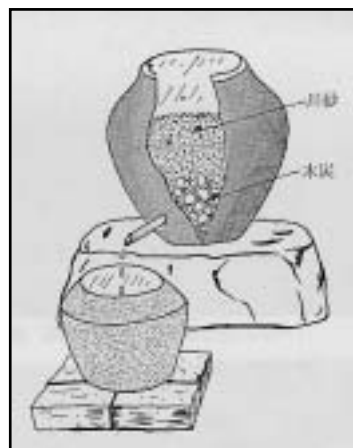


図3-9 ハンズウガメ
(「佐賀市史」¹⁹⁾より)

人はアオの水で入れたお茶が一番おいしいとおっしゃるらしいですよ」²⁰⁾と言われるほどであった。また、「寒の水」と呼ばれる 1、2 月の最も寒い時期のクリークの水は、1 年で最も水が澄んでいみずにもちをつけておくと 1 年近くおいしく食べられていたという²¹⁾。

風呂水

クリークの水は風呂の水にも利用されていた。バケツ等でクリークから何度も水を汲み出し、風呂を溜めたという。集落内に共同風呂があるところもあった²²⁾。

カワジ・タナジ

クリーク地帯の農村の家庭には、必ずといっていいほどカワジ、またはタナジと呼ばれる水汲み場があった。生活用水をクリークから汲み上げるために石や木で作られた足場で、家の中でも台所や風呂場などに近いところに作られていた。図 3-10 のように階段状になっており、夏高く冬低いクリークの水位に合わせて利用できるようになっている。主婦にとっては家庭内において



図 3-10 カワジ
(佐賀中部農林事務所提供)

て最も重要な作業場であるため、いつも作業がしやすく、清潔に保たれていた。このカワジは、飲料水や風呂水を汲み上げる場であり、食材や食器を洗ったりする場でもあった。

また、人々は料理の残飯などに集まる魚を捕るのも楽しみであり、カワジは釣りに好都合の場所であったという²³⁾。また、クリークは集落内でつながっているものであるから、その利用においては近所同士で細心の注意が払われていた。千代田町嘉納では、ある家庭で伝染病がはやると、すぐに集落内に広報されたという²⁴⁾。

(2) クリークの生物との関わり

人間はクリークから、水の供給だけでなく食という面でも恩恵を受けてきた。その一つにクリークに生息する生物を食していたことが挙げられる。

クリークの魚

クリーク地帯の農家には、必ずと言っていいほど柿の木が植えられていた。実はこの柿木は、クリークの魚と深い関係がある。魚を捕るための網に、柿からとれる柿渋を塗ることで、網が腐らず、丈夫になったというのだ²⁵⁾。また、柿渋は、その他に木桶などにも塗られており²⁶⁾、ここにもまた、住民とクリークとの関わりをみることができる。

クリークには、フナやコイなどの魚が多く生息しており、貴重なタンパク源として食されていた。そのため、クリーク地帯には、魚を使った「ふなのこぐい」や「焼ふなご」な

どといった郷土料理があり、日常の食事から保存食に至るまで、クリークの魚を使った料理が多くあった。「フナを食べるとふがよい」²⁷⁾といわれており、祝いのときの食事にもなっていたように、縁起物でもあったようだ。また、水位が下がる秋口になると、福岡などからも釣り人がやってくるほどクリークではフナ釣りが盛んであった。

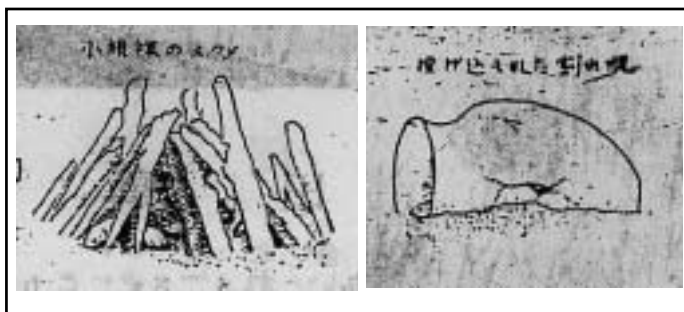


図 3-11 堀干し風景
(「ふるさと佐賀の自然」²⁸⁾より)



図 3-12 おくんち料理
(「聞き書き佐賀の食事」²⁹⁾より)

魚を捕るにあたって、通常は、竿や網などを使っていた。この他に、魚をより多く捕るために、堀の中にヌクメ³⁰⁾やカマと呼ばれる漁礁を作っていた。ヌクメには多くの種類があり、割れた甕を投げ込んだだけのものから、小屋ほどもある大きなものまでさまざま、南向きが最上とされた³¹⁾。このヌクメは、米収穫後の堀干しのときと2月から3月にかけての再び堀が干される泥土揚げのときに開かれ、修繕される。



北川副町下武のSさんは、あるときのゴミクイについて図 3-15 のような絵をかきながらこう語ってくれた。「ヌクメの大きさは15メートルから20メートルもあるところもあって、水車を3段にして水を落しよった～中略～小学校4年か5年のときでしたかね、180本もコイがとれたこともあったですね。そのときは分けるにしても多すぎるけんですね、業者にくらかもらって引き

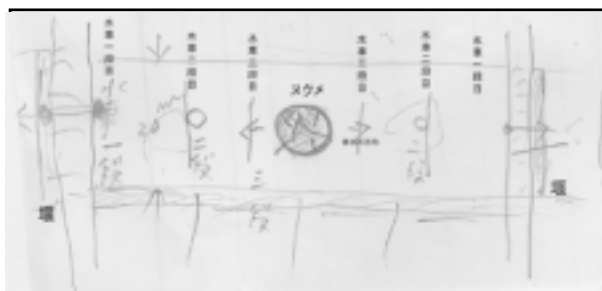


図 3-15 ヌクメ開きの方法 (Sさん書)

取ってもらったごたですね。(ヌクメの大きさは15メートルから20メートルもあるところもあって、水車を3段にして水を落としていた～中略～(私が)小学校4年か5年のときだったでしょうか。180匹もコイがとれたこともありました。そのときは分けるにしても多すぎるので、業者にいくらか(お金を)もらって引き取ってもらったようですね。)」また、兵庫町藤木のYさんは、「麩とかを堀に入れとったですね。泥のたまつとるやろうばってん、まだあそこんたいには埋まつとるやろう。(麩とかを堀に入れていました。泥がたまっているだろうけど、まだあのあたりには埋まっているだろう。)」と話してくれた。

この方達は、今でもヌクメのあった場所を覚えているほど印象深いものであったのだろう。ヌクメは、ふだん労働に汗を流している農家の人たちの楽しみであり、ここにも人とクリークが魚を通して密接に関わっていることがわかる。

クリークの水生植物

クリークには、菱や蓮、葦など、多くの種類の水生植物が生息している。秋になると菱が実り、栗のような味で好んで食べられた³⁴⁾。菱の実の採取は、農村の女性たちがハンギーというたらいに乗って行い、採取された菱の実を佐賀市の市街地などで「ヒシヤンヨー」³⁵⁾の声とともに売り、臨時収入を得ていた。北川副町下武のSさんは、「私の母も菱をといたんですよ。菱の実とりは女の人の副業でし



図 3-16 菱の実とりの風景
(1999年千代田町町勢要綱 p.6)

よらしたもんね。ハンギーに乗ってから菱をとって佐賀のまちに売りにいきよったですよ。～中略～堀にも菱のようにとれるとこととれんところがあるけんですね、菱をとる場所は区分けして、入札制やったです。よう取れる堀はやっぱり少し(値段が)高くてですね・・・。

(私の母も菱をとっていました。菱の実とりは女の人が副業で行っていたんですよ。ハンギーに乗って菱をとって、佐賀のまちに売りに行っていました。～中略～堀にも菱がたくさんとれるところととれないところがあるから、菱の実をとる場所は区分けして、入札制でした。たくさんとれる堀はやっぱり少し高くて・・・。)」と話してくれた。この菱の実とりと菱の実売りの風景は、佐賀平野の秋の風物詩として親しまれていた。

蓮もまた、クリークでは多く見られていた植物である。蓮はその用途が多様で、葉・花・実・根のすべてを利用されていた。まず、葉は、釣れた魚を持って帰ったり、酒やご飯を入れたり、タバコの代用とされたり、傘の代用とされたり、前述の菱の実とりをする女性

においては尿意を催したときに蓮の葉で用を足したりというように、さまざまな用途があった³⁶⁾。花と実は子供に関係が深く、束ねた花や、実を近所の駄菓子屋などに売って小遣い稼ぎをしていたという。兵庫町大字淵のIさんは、「子供のときに蓮の実ばとって売りに行きよった。とった蓮のみは蓮の葉っぱに入れて持っていきよったもんね。(子供のときに蓮の実をとって売りに行っていた。とった蓮の実ば蓮の葉っぱに入れて持って行っていた。)」という。クリークの水位も下がり、12月になると、蓮根掘りが始まる。蓮根掘りは、クリークの水を落として、泥土の中に入れて行われる。現在では蓮根の栽培は、一部で産業として行われているが、昔はどこでも行われており、いろんな料理に使用された。この他、自分の堀と隣の堀の境目に目印のために蓮を植えた人もいたという³⁷⁾。

(3) 子供とクリーク

前項の蓮の実とりのように、クリークは子供の遊びの場ともなった。夏場はプールとなり、子供たちはクリークで泳ぎを覚えた。兵庫町下淵のFさんは、「まあ泳ぎきらんときに上級生にボーンと堀に放り入れらるっつですよ。そんなときは、『なんでこがんことばさすとか』と思って(上級生に)腹の立つとばってん、必死で泳いで、いつのまにか岸の木の根っこにしがみついたらとるですもんね。そいぎ『ありゃ、およぎきった』って気づくつですよ。そしたら腹の立つとった上級生にも感謝してしまうつですよ。『放り入れてくいらしたけんが』って。放り出しても上級生はちゃんと岸で見よらすもんね。おぼれんごとき。泳ぎきらんとば泳ぎきつごとしてやろうていうことたいね。(まだ泳ぐことができないときに上級生にボーンと堀に放り入れられるんですよ。そのときは『なんでこんなことをするのか』と思って腹が立つんですけど、必死で泳いで、いつのまにか岸の木の根っこにしがみついているんですよ。すると、『あれ、泳げた』と気づくんですよ。そしたら腹が立っていた上級生にも感謝してしまうんですよ。『放りいれてくれたから』と。上級生はちゃんと見ているんだよね。おぼれないようにね。泳げない子を泳げるようにしてやろうていうことなんだね。)」と当時の思い出を語ってくれた。また、「上級生は深いところで、下級生は浅いところで泳ぎよった(泳いでいた)」³⁸⁾という話や、「集落の1年生から8年生までみんなでクリークに泳ぎに行つて、泳げない1年生は堀に放り入れられ、必死で泳いでそのうち泳げるようになった。(要約)」³⁹⁾という話もある。これらの話に共通するのは、上級生下級生という関係である。上級生が下級生に泳ぎを教えるといった子供社会が、クリークでの遊びを媒介として強まっていたと考えられる。子供たちにとってもクリークは遊び場として欠かせない重要な存在であり、子供の頃から集落の結束を強く持っていたのである。

(4) クリークに関係する年中行事

クリーク地帯には、人間活動とともにクリークも移り変わり、また、クリークからの恩恵に対して感謝の気持ちを表す行事が各地にみられた。代表的な行事として、水神を祭る行事がある。水の乏しい佐賀平野にとって、クリークの水は命の水とされ、水に感謝する祭りや水難を防止する祭りが佐賀平野全土に広がっていた。

クリークの水位が上昇する春から夏にかけては、「ひゃーらんさん祭り」⁴⁰⁾ といって、子供がクリークで溺れないように祈る祭りがあった。この地域には河童伝説が多くあり、たびたび起こる水難は、河童が足を持って引きずり込もうとするからだ、と信じられていた⁴¹⁾。そのため、水難を起こす河童の気を静めるために川や堀の岸に2人分の供え物をしていた。この行事は各家庭や近所同士、または部落で行っていた。また、氏神が祭られているの境内へ弁当持参で参拝やおこもりをするところもあった⁴²⁾。

秋の収穫時期に、水神に感謝する地域もある。この行事は堀りの中に水神の像を作って祭り、水位の高い稲作の時期に堀の中で水を守ってもらったことに対して、秋の米収穫後、堀の水位が下がる季節に顔を出した水神さまに感謝していた⁴³⁾。このように、水の中に神を祭ることで、クリークを感謝する対象としていたのである。

この時期、ちょうど各地でお供日(くんち)と呼ばれる行事がある。各集落ごとに日が決まっており、この供日にあわせて堀干しを行ったものであった。2・3月の泥土揚げのときも堀干しを行うが、この秋の堀干しは、基本的には魚をとるための行事であった。前述したヌクメが開かれるもうひとつの行事である。



図 3-17 クリークの中から顔を出した水神さん(ひょうたん島公園内)

3-1-3 戦前における人とクリークとの関係のまとめ

以上のように、戦前においてはクリークが生活空間の一部として密接に関わっていたことがわかった。以下にその関わりをまとめる。

- 生活用水を汲むときや子供の遊びにみられる、直接的な関わり
- クリークの中の生物の採取や泥土の利用を媒介とした関わり
- クリークをより効率的に利用するための道具による関わり
- そのような活動の中から発生する人と人とのつながり

これらの関係は様々な方面に関わっていたように多元的で、またそれぞれが独立して行われるわけではなく、相互に関係を持ち、重層的であった。

このように人はクリークから多大な恩恵を受けており、これらの関係は、祭りや行事にみられるように、人の精神的世界にも影響していることがわかった。また、泥土揚げに代表されるクリークの維持管理活動は、物質循環を供えたもので、クリークと人間が相互に関わっていたといえる。

1

1) 2) 佐賀平野において、大正時代後期から昭和初期にかけて、電気灌漑と品種改良によって米の収穫量が飛躍的に伸び、1935 年前後には、反当り収量が全国一となった。この時期を「佐賀段階」と称し、この発展を遂げたクリーク地帯の農業をこう呼んだ。

3)

4)

5)

6)

7)

8)

9) 10)

-
- 11)
12)
13)
14)
15)
16)
17)
18)
19)
20)
21)
22)
23)
24)
25)
26)
27)
28)
29)
30)
31) 堀
32) 「堀」
33)
34)
35)
36
37)
38) 北川副町下武 S さんより。
39) 千代田町嘉納 K さん
40) 「ひゃーらんさん」とは、佐賀弁で「入らないように」という言葉で、川や堀に入っておぼれないようにという願いが込められている。
41)
42) 神崎町史
43) 佐賀市兵庫町大字湊 F さんのお話より